

学習展開事例 3

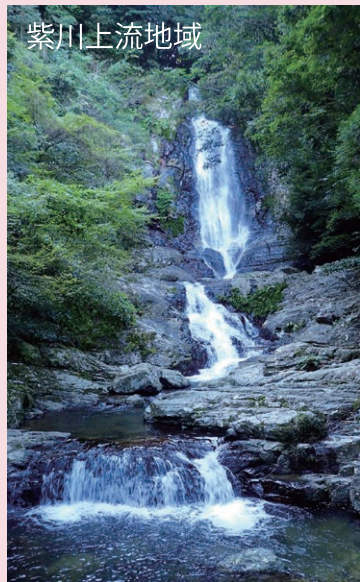
都市と農村を結び山川海のつながりを価値に変えるまちづくり ～ 福岡県北九州市小倉南区 ～

日本を代表する環境都市、北九州市は日本の近代化のさきがけとなった産業都市でもあり、公害や環境問題を早くから経験した地域で、同時に、今なお多様な自然環境が残されている地域でもあります。中でも小倉南区は近代的な都市と自然豊かな農村が隣接し、山川海のつながりをイメージすることができる地域です。ここでは、都市部が抱える問題と農村部が抱える問題を個別にではなく地域全体の大きなつながりの中で捉え直し、解決への道筋を考える学習を行っています。

小倉南区で取り組んでいる川を活かして農村(上流)と都市(下流)をつなげるまちづくり学習と流域社会を映し出す鏡としての干潟から取り組む未来のまちづくり学習の2つの事例を紹介します。

自然環境の特徴

北九州市小倉南区とその周辺では、山と川と海、ため池や水田に畑、干潟、市街地など多くの環境要素が混在しているという特徴があります。エリア内には水質汚濁を克服した紫川が流れ、カルスト地形で有名な平尾台やカブトガニが生息する曽根干潟があります。また絶滅危惧種の一つであるガシャモクという水草が残るため池など豊かで特色ある自然環境が今も残されています。



紫川上流地域



小倉南区を中心とした衛星画像

©JAXA/RESTEC



曽根干潟



ため池

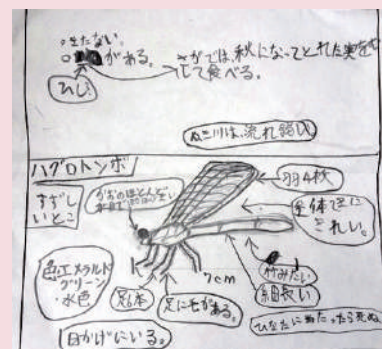
学習展開事例 3-1 川を活かして農村(上流)と都市(下流)をつなげるまちづくり ～～ 涼のシンボル、ハグロトンボと一緒に考えるまちづくり ～～

ここでは、紫川の上流と下流に位置する学校の取り組みを紹介します。「紫川で見られる涼しい場所が好きなハグロトンボに、みんなの町の秘密を教えてもらおう。ハグロトンボの道を探してみよう。」そんな問いかけから紫川をテーマにした学習が始まりました。

長さ22.4kmの紫川は、上流に農村部、下流に都市部を持ち、山と海を結ぶ北九州市を象徴する河川です。紫川は、かつての深刻な水質汚濁を乗り越え、環境再生が進められ多くの生物が戻ってきました。しかし、新たな問題として、下流の都市部ではヒートアイランド現象や生物多様性の低下などの問題があり、上流の農村部では過疎化や里山の荒廃といった問題が生じています。これらの問題を抱える地域をそれぞれどのように改善していくのか、子ども達が川につながりを通して考えていきました。

1 川は生き物たちの通り道、つながりの大切さに気づく

「生きものとお話できるようになると今まで見えていなかったことが分かってくるよ。生きものとお話できるようになる。」生き物の目になって地域を見直すと、様々なつながりが見えて来ます。学校やビオトープで見つけた生き物たちはどこからやって来たのだろうか、その謎を探っていくと、離れた住処と住処を結ぶ生き物の移動路(様々な通り道)があることに気が付きます。中でも川は連続した環境として多くの生き物の通り道となり重要です。生き物の通り道としての川が存在に気づくことで、川によって自分たちの地域が他の地域とどのようにつながっているのか関心を持つようになります。



2 涼しさの指標ハグロトンボの道を通して地域を見直す

北九州市内では市街地でもハグロトンボの姿を見ることができます。ハグロトンボは日本の主要都市からは1980年頃には姿を消していますが、北九州市内では今でも所々で見ることができます。ハグロトンボは、きれいな川で幼虫時代を過ごし、成虫になると成熟するまで川の近くの森林など涼しい所で過ごし、晩夏から秋にかけて川に戻って水草に産卵する生活をしています。



生物は種類によって、それぞれ移動に必要な条件が異なりますが、ハグロトンボは涼しい所を求めて移動します。子ども達はハグロトンボを調べることで、市内の所々に山があつて川の多い北九州市の特色に気づくことができます。ハグロトンボの道を探べ、ハグロトンボの目になってまちを見直すことで、市内に広がる水の道や涼風の道が見えてきます。



3 川につながりを通して、地域の価値や可能性を再発見する

市内を流れる紫川では、上流から下流までハグロトンボを見ることができますが、上流の農村部では普通に見られるのに対して、下流の都市部では稀にしか見られません。上流の小学校ではたくさんいるハグロトンボがどこまで移動できるのか、下流の小学校ではハグロトンボがどこから来たのか、どうしたら増やせるのかを、紫川のつながりを通して考えました。

学習を通して、上流の小学生には自分たちの地域が、下流の都市部に生き物や涼風、きれいな水を送るという機能を高めていく都市づくりの発想を、下流の小学生には紫川を通して上流部から都市部に送られてくる自然の恵みを都市空間に広げていく都市づくりの発想を、それぞれに促します。



4 つながりを理解することで、より広い視野で問題を捉え、解決に導く発想力を育む

このように川を通して、子ども達が自分たちの地域とは異なる地域とのつながりを意識した学習を行うことで、今まで以上に地元の特色を理解し、地元の特色を活かしたまちづくりの提案を考えることができるようになります。農村部と都市部が抱えている問題をそれぞれ別々に取り上げ解決方法を考える学習から、より広い視野で地域を超えたつながりを活かしつくることで、地域の潜在的な可能性を引き出し、解決方法を考え出す学習に転換することができます。このような地域の潜在的な可能性や価値を発掘していく発想を子ども達に促すことで、環境学習をさらに内容豊かに深く発展させ充実させていくことができます。

● 環境問題にポジティブに取り組む姿勢を育む

一般的に環境学習では、問題を解決するためにマイナス要素をいかに減らすか無くすかといった発想で取り組む例が多く、このような問題解決型の学習ではゴミ拾いやポスターなどによる環境改善活動や意識啓発活動などにパターン化(自己完結)しがちです。

この学習プログラムは、これまで述べてきたようにビオトープなどで身近にいる生き物がどこから来るのかという子ども達への問いかけから始まり、子ども達が地域に眠る環境のつながりに気づき、さらに大きなつながりとしての川が存在に気づくことで、地域の環境問題を見つめる新たな視点や広い視野を持つことを促していきます。

子ども達が地域に潜在するつながりを掘り起こし、地域のつながりから発想することにより、これまで思い付かなかった解決方法を提案することができるようになります。問題の解決に向けて、地域の中のつながりを活かしたり、新たなつながりを生み出すという発想で取り組んでいくことは、環境に取り組む子ども達の姿勢をマイナス思考からプラス思考へと大きく転換させます。

子ども達が環境問題に取り組む中で、地域に眠る価値の存在や価値創造の意味を知ることは、地域の持続的発展や真の活性化を実現する上で重要です。学習を通して子ども達の中に、地域の潜在的な可能性を引き出そうとする意欲や主体的に学ぼうとする意志、自分たちが未来の地域づくりの主役であるという自覚が芽生えていきます。



次は干潟をテーマに取り組む学習を紹介します。北九州市にはカブトガニやズクロカモメなどで知られる曽根干潟があります。干潟は全国的に減少している貴重な自然です。干潟は、環境の変化に敏感に反応する場所で、地域のあり方や地球環境を映し出す鏡と言われています。

曽根干潟には、北九州市内にある山や街や農地など様々な場所から川を通して様々なものが流れ込んできます。また、干潟は潮汐や潮流といった海の環境の影響を受けやすく、地球温暖化による海面上昇などの地球環境の変化も大きく影響する場所です。グローバルな視点で見ると、干潟はシベリアや北極圏とオーストラリアや東南アジアを大移動するシギなどの渡り鳥の重要な中継地にもなっています。このように干潟は流域の自然や社会のあり方を映し出すと共に、地球規模の環境の変化を映し出す鏡でもあります。

干潟をテーマとした学習では、身近な環境問題や日々の暮らしのあり方を考えることと、地球環境問題を考えることが直結しているのだと、干潟の生物や渡り鳥をとらえて理解することができます。この曽根干潟が近隣にあり長年学習テーマとして取り組んできた小学校で実施したまちづくり学習について紹介します。

1 学校と干潟を結びつける生き物の道 生物の移動をとらえて身近な空間を読み直す

干潟が近くにあっても、自分たちの学校や街と干潟とのつながりを意識することはなかなかできません。この学習プログラムでは、つながりを理解する目を子ども達の足元から広げていきました。学習はまず、学校や周辺で見られる身近な生き物の観察から始まりました。校庭に以前からあったビオトープ池の水が干上がり多くの生物が姿を消していたことから、ビオトープを作り直して生き物を呼び戻す活動を行いました。生き物と相談しながらビオトープ作りを考えるために、生き物のからだのつくりとすみか、くらしを学ぶ「生きものとお話する方法」の授業を行い、この地域に昔からあった湿地を復元する形で、ビオトープをみんなで再造成しました。

ビオトープは、新しく作られた生息場所なので最初はほとんど生き物が見つかりませんが、しばらくすると次々と新しい生き物が発見されるようになります。それらの生き物たちは周囲から移動して来たものです。子ども達と、それらの生き物たちがどこからどのような所を通して学校のビオトープへ来たのかを調べました。それらの生き物の中には、曽根干潟周辺に見られる種類も含まれていました。このような生き物の移動を通して周囲の環境を見直すことで、子ども達は干潟やその周辺と学校周辺との結び付きを意識できるようになりました。



2 干潟の生き物から様々なつながりを学ぶ

子ども達は一年生の頃から何度も干潟に行って様々な体験学習を行っています。それらの体験を振り返りながら、干潟の生き物のからだのつくりやすみか、くらしの関係について調べ、それぞれの生き物が餌の取り方や餌のすみかに合わせた体のつくりをしていることや、干潟の中の僅かな凹凸や底質の違いなどを活かして暮らしていることなどを学んでいきました。

また、それらの多様な生物が生息できる多様な環境を生み出しているのは、流域から川を通して海へ流れ込み、干潟に集って来た土砂や森林などからの栄養分であることを学習しました。同時に、干潟に集まって来るのは、生き物に必要な土砂や栄養分だけではなくゴミや汚染物質などの人間の生活の中で発生するものも含まれていることに、干潟の清掃活動などを通して気づきました。

これらの気づきを通して、子ども達はこれまでは実感できなかったゴミや水質汚濁などの都市問題と干潟の生き物たちとのつながりを意識できるようになりました。さらに、二酸化炭素の排出増加などによる気候変動の影響を受けやすいとされる地域(北極圏や熱帯)から干潟に渡来するシギなどの渡り鳥の減少などを通して、地球環境問題への取り組みと干潟の生き物の保護活動を結び付けて考えることができるようになりました。



身近な干潟の生きもの トビハゼ



カブトガニ



3 干潟や生き物と自分たちの暮らし方や生き方を結び付けて考える

干潟を自分も含む様々なつながりの中に存在するものとして捉え直し、社会や地球の今を映し出す鏡として見つめることができるようになったことで、各学年で子ども達が学んできた様々な環境や社会をテーマにした学習が関連付けられていきます。子ども達は、干潟の生き物を見つめることで、ゴミ問題やリサイクル、地球温暖化、水汚染、森林減少などの多様なテーマを干潟を通して結び付け、自分の方法で総合化する力をつけていきます。総合化とは、このように子ども達がひとつの場を通して、自分の方法で多様なものを結び付けようと試み、その中にひとつの文脈(物語)を見出すことです。

干潟を深く掘り下げて見ることで、ひとつの対象から多様な分野へと広がる様々なつながりがあることに気づくことで、子ども達の中には環境問題をそれらのつながりを活かすことで解決させようという発想が生まれて来ます。

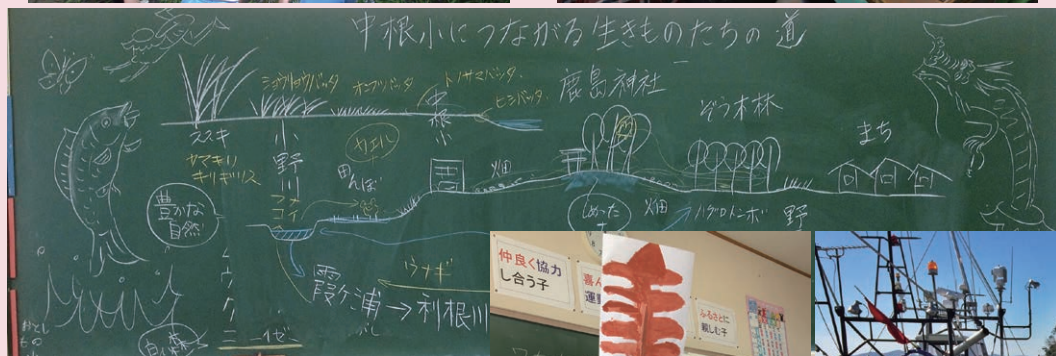
4 自分たちの取り組みを振り返り未来への思いを後輩たちに伝える

自然や環境をテーマとした学習に回答は用意されていません。これらのテーマは、どこまでも掘り下げていくことができ、どこまでも広げていくことができます。また、環境問題の解決には、長期の取り組みが必要です。そのため、子ども達が学習を実施している期間中に成果を上げ、目標を達成することは多くの場合困難です。

しかし、それは「継続は力なり」と体験や取り組みをただ繰り返し継続していけばいいということを意味していません。子ども達が一年間または数年間学習してきたテーマについての解決方法を自分たちで考え、ひとつの提案としていくことが重要です。それらは、たとえ仮説や検証途上であったとしても、それまでの自分たちの取り組みについて振り返り、残された課題や問題を明らかにし、それらを後輩たちにきちんと分かりやすく伝え、取り組みを継続させていくという意識が、環境をテーマとした学習のみならず、社会の様々な問題と向き合っていく姿勢として大切です。

このような学習の場として、上の学年から下の学年への引き継ぎ会は、たいへん効果的です。この小学校では、毎年六年生が卒業を前にして、下の学年の生徒たちや地域の大人達に向けて、六年間の曽根干潟をテーマとした様々な学習を通して学んだことを振り返り、ひとつの物語として伝える環境フォーラムが開催されています。このような学習の場は、干潟は子ども達の成長した姿を映し出す鏡にもなっています。





アサザプロジェクトの出前授業では、未来に向けたみなさんの思いを形にしていく支援をしています。
みなさんの思いをまずはお聞かせください。



この冊子は独立行政法人環境再生保全機構地球環境基金の助成を受けて作成しました。